えどがわの女性
vol.14
2013年
3月

「編み物とわたし」

石井 恵津子（いしい えつこ）
1939年（昭和14年）
江戸川区鹿骨1丁目
生まれ、在住

時代の変わり目

わたしが生まれた鹿骨（ししぼね）は、由来のある町なんですよ。奈良時代に、常陸国（ひたちのくに）の鹿島神宮から奈良の春日大社にお使いとして行った神鹿（しんろく）が途中で亡くなり、このあたりに埋葬されたそうです。

わたしが子どものころ、家から先は全部田んぼ。我が家は昔からお米と野菜を作っていました。農家でしたが父は区議会議員をしていたので、農作業は祖父母と母がしていました。母は栃木生まれで、助産婦をしていたんです。鹿骨に嫁いで、近くに病院ができる前は、赤ちゃんを何人かとり上げたそうです。母のカバンを開けるといろいろな器具が入っていたのを思い出しますね。

昭和20年に小学校に入学しました。今は交通も便利になりましたけど、当時はどこに行くのも歩きでしたね。鹿本中学校へは3キロ歩いて通いました。高校は西小岩の愛国高等学校で、家から学校まで4キロくらい。1年間は自転車で通ったけど、雨の日には歩いて1時間かかったんですよ。新小岩駅にバスで行けるようになって、2年生からバスと電車を乗り継いで通学したんです。

わたしは3人きょうだいの真ん中のひとり娘で、両親の窮屈（きゅうくつ）すぎるくらいの愛情の中で育ちました。学校からどこかへ行く時は、今からどこどこに行くので遅くなりますと友だちに家へ電話してもらってね。高校を卒業して会計事務所に就職したんですけど、外で勤めることもやっと許してもらったほどで、親には気を遣いましたね。

5年ほどで会計事務所を退職し、昭和36年に結婚。相手は隣村の谷河内（やごうち）に住む人で、農協に勤めていました。父がわたしを離したくなかったため、実家の土地に家を建ててくれました。主人は長男でしたが、長男だから家を継がなくてはいけないということがない時代になってきたんですね。朝、主人を送り出すと時間ができたので、編物教室に習いに行きました。編み物を自由にできることが、とても楽しくて嬉しかったですね。

わたしたちの時代は、なにしろ世の中がガラッと変わったんですよね。実家では農家の生活様式で、かまどに火をいれてお釜でご飯を炊いていたのが、結婚と同時に炊飯器、冷蔵庫、洗濯機、掃除機という電化製品を全部買って所帯を持ったんですからね。わたしより年上の人たちは、お嫁に行くと、家事で苦労して好きなことをするという時間はとても持てなかったと思うんです。女性にとって、本当の変わり目だったんですよね。

恵手芸（めぐみ）サークル

実家と主人の協力のおかげで子どもが生まれてからも、週に一回編み物を習いに通うことができました。シルバー編機というメーカーの資格ですが、師範の免状を取ることができたんです。

昭和47年に父が亡くなると、不動産業に使っていた部屋をそのままにしておくのはもったいないということになったんです。当時、上の女の子が11歳、下の男の子が6歳と、子どもたちがまだ幼かったんですが、「恵手芸サークル」という編物教室を開きました。教室の経営が軌道にのるまで5年くらいかかりました。

今から思うと、昭和55年くらいが編物教室にとってちょうど良い時代でした。編み機は5，6万円もするのに、バブルと同時にフル生産されて。わたしの教室でも編み機を揃えて、機械編みと手編みの両方を教えていました。

チラシを配ると新しい生徒さんが、20人くらい入ってきたんですよ。多い時は、教室に生徒さんが30人くらい来ていましたね。平井にも教室を開きました。バブルがはじけると同時に編み機が売れなくなって、何もいらない手編みの方が主流になっちゃいましたけれどね。

当時の会費は2時間で千円でした。お金をいただいて人様に教えるからには、技術だけでなく、話し方や身のこなし方なども大事なんですよね。シルバー編機の講習会に行くと、先生方から良いところを取り入れて磨くようにしていました。

そのころは、日本編物協会のファッションショーにニットワンピースを作って発表したり、鹿骨区民館祭りで子どもさんに小物の作り方を教えたりしていたんですよ。作ることや教えることに張り合いを感じて、わたしにとって楽しく幸せな時代でした。

主人も子どもたちも仕事を辞めろとは言いませんでしたが、外の仕事で家を空ける時は気を遣いましたね。

江戸川区聞き書き研究会

聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

例えば、夜の7時に帰るよと言って8時に帰ると、すごく大騒ぎされたんです。8時に帰るよと言って7時に帰ると、安心するんですね。

下の男の子が小学1年生くらいの時でした。わたしが講習会からもうすぐ帰って来るだろうと、バス停で待っていたんですよ。ひとりで留守番していて寂しくなったんでしょうね。驚きましたけど嬉しかったですね。息子が学校で、「うちのお母さんは手編みと機械編みの両方を教えている忙しい人です」なんて作文を書いたことがあるんですよ。子どもはわたしの働く姿をよく見ているんだなと思いました。その作文は、捨てることができなくて、今でもとってあるんです。

◆区民館祭りで編み物を教える石井さん(左)

平成4年、わたしが53歳の時、主人は高血圧、肝臓を患い、55歳で亡くなりました。自宅で編物教室を開いて、生徒さんに教えていることを誇りに思ってくれたようですが、わたしが仕事であっちこっちに出かけ、寂しい思いもさせたようです。主人の酒量が増えたのはそのためか、それとも運命なのかなと思ったりして、今考えると複雑な気持ちなんですけどね。

若い人に繋(つな)げたい

孫は23歳の女の子ですけれど、編み物には全然興味がないんです。わたしが編み物をしていても、「何作っているの」と聞くこともないですし、「こういう髪飾りいる」と聞いても、「いらない」と言うんですよ。作らないでも安く買えるようになってしまいましたからね。これから編み物はどうなっていくんでしょうかね。

わたしが役員をさせていただいている日本編物協会は、日本で最初にできた編物指導者の団体で、創立60周年を迎えました。全国におおぜい会員がいたんですけれど、みな高齢になってしまいました。新しい技術を習いに行ってまで教えるかというと、そこまではということになっちゃう。自分の楽しみで編んで、自分が着ればいいとなってしまうわね。

若い人に興味を持ってもらうのが良いのですけれどね。わたしが学生のころは、家庭科で先生が手袋や靴下の編み方を教えてくれたんですよ。それが学校ではやらなくなってしまった。だから編み物に携わらないで大人になっちゃうんですよ。わたしみたいに、学校で編み物をやって好きになったという根っこがないんです。編物業界が若い人に興味を持ってもらいたいと、テレビで安い毛糸と編み棒のセットを宣伝しても、ちょこっとだけやって、できないと放ってしまう。そんな時代になってきている。だから、根っこを作りたいんですよね。

このままでは、どんどん編み物は衰退してしまうと心配していたところ、高校の家庭科の先生になった孫のお友だちが、「クラブ活動で編み物をやりたいから教えて」と来たんですよ。同じ毛糸を使っても、編み針の太さや手の加減で、でき上がりは人によって違いますよね。だから、孫のお友だちには鎖編みや長こま編みで「一針適正ゲージ」を作る基礎から教えたんです。「こんなこと知らなかった」と驚いていました。

好きか嫌いかは、編み物を教えている間に見ればわかるんです。いっしょうけんめいやっていたから、これであきらめちゃう子ではないなと思いましたけどね。孫の話では、「あの人ね、編み物が好きになったみたいよ」と言っていました。若い子に編み物を教えることができて、楽しかったですね。

家庭科の時間で編み物を教えられなくても、クラブ活動で教えてくれるという人がもっと出てくれば良いですね。100人教えて5人くらい好きな人が出てくれたら、次の時代に繋げられる。めんどうくさいと思う人はだめだけど、「どうしてこうなるの、何でこうなるの」と、興味を持ったらどんどんと好きになっていきますよ。小学生時代にリリアンなんかに興味を持つでしょ。だから、そんな年齢のころに編み物を教えたら良いですよね。

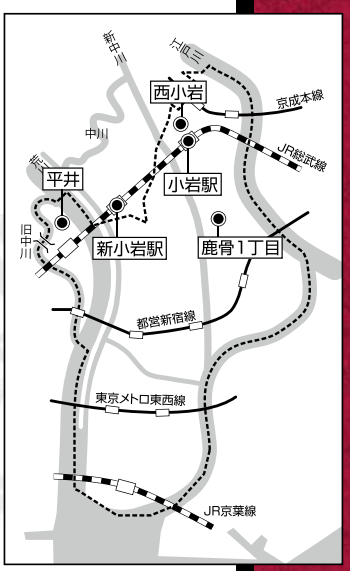
編み物があったから

編み物を教えるということをしなかったら、わたしは何も知らない主婦で終わっていたと思いますね。父母や主人の協力があった恵まれた環境でも、家庭と仕事を両立させることは大変でした。続けられたのは一針一針編んでいる時間が好きで、でき上がった時の喜びがあったから。

中学の時、家庭科の実習でセーターを1枚仕上げたら、「えっちゃんすごい。将来編み物の先生になるんじゃないの」なんて友だちから言われたことがありました。今振り返ると、その時セーターを編み上げたことが嬉しくて、やればできるという自信につながったように思いますね。自分で切り開いて編物教室を40年間続けてきたことが、大きな財産となっています。

平成3年、『産経新聞』に、「自由気楽に編み物を」という見出しで、わたしの編物教室を取り上げていただいたこともありました。長続きのためには、人間関係が大切なんですよね。おかげさまで、窮屈な関係は無く、楽しい雰囲気の中で教えることができました。

教室を閉めようと思ったこともあるけれど、やっぱり教えることが好き。来てくださる方がいらっしゃるうちは、いつまでも開いておきたいですね。



◆ インタビュー／2012年2月
◆ 聞き手／平野靖子　伊藤直美　高橋昌子　村田正子
◆ コーディネーター／磯谷真理子　樋口政則　小野塚和江

◆お問い合わせ◆
江戸川区女性センター
☎5676-2455(代)